

【課題5】

みなみまち さしのぞ あさみ たんぼほ
南町の私の家を差覗く人は、薊や蒲公英の生えた舊い土藏づくりの朽ちかゝった屋根の下に、濫い店格子を透いて、銘酒を満たした五つの朱塗の樽と、同じ色の枺のいくつかに目を留めるであらう。さうしてその上の梁のついに、紺色の可憐な燕の雛が懐かしさうに、牡丹いろの頬をちらりと巢の外に見せて、ついついと鳴いてゐる日もあつた。土間は廣く、みせいっぱい やくしゆやしき がらす わさびいろ
店全幅の薬種屋式の硝子戸棚には曇つた山葵色の紙が張つて、その中ほどの柱に阿蘭陀渡の古い掛時計が、まだ正確に、その扉の繪の、眼の青い、そして胸の白い女の横顔のうへに、チクタクと秒刻の優しい歩みを續けてゐた。その戸棚を開けると緑礬、硝石、甘草、肉桂、薄荷、どくだめの葉、中には賣薬の版木等がしんみりと交錯がつた一種異様の臭を放つ。それはある漂浪者がこゝに來て食客をしてゐた時分密かに町の人に薬を賣つてゐたのが、逝くなつたので、そのまゝにしてあるといふ、舊い話であらう。

ざぼん おいき いっ ふう
庭には無論朱樂の老木が十月となれば何時も黄色い大きな實をつけた。その後の高い穀倉に秋は日ごとに赤い夕陽を照りつけ、小流を隔てゝ十戸ばかりの並倉に夏の酒は濕つて悲しみ、あたた 温かい春の日のぺんぺん草の上に桶匠は長閑に槌を鳴らし、赤裸々の酒屋男は雪のふる臘月にも酒の仕込みに走り回り、さうして街の水路から樋をくぐつて來るかの小さい流は隠居屋の涼み臺の下を流れ、泉水に分れ注ぎ、酒桶を洗ひ眞白な米を流す水となり、ながれ
たまりみず がめのしゆぶ たけ
同じ屋敷内の溜水に落ち、ガメノシユブタケ（藻の十種）の毛根を幽かに顫はせ、然るのち、ちゆうまえんだの菜園を一周回して貧しい六騎の厨裏に濁つた澱みをつくるのであつた。そのちゆうまえんだはもと古い僧院の跡だといふ深い竹藪であつたのを、私の七八歳のころ、父が他から買ひ求めて、竹藪を拓き野菜をつくり、柑子を植ゑ、西洋草花を培養した。そこでもなほ晝は赤い鬼百合の咲く畑に夜は幽靈の生じろい火が燃えた。

さゆうか やしう あぶらや
世間ではこの舊家を屋號通りに「油屋」と呼び、或は「古問屋」と稱へた。實際私の生家は此六騎街中の一二の家柄であるばかりでなく、酒造家としても最も石數高く、魚類の問屋としては九州地方の老舗として夙に知られてゐたのである。